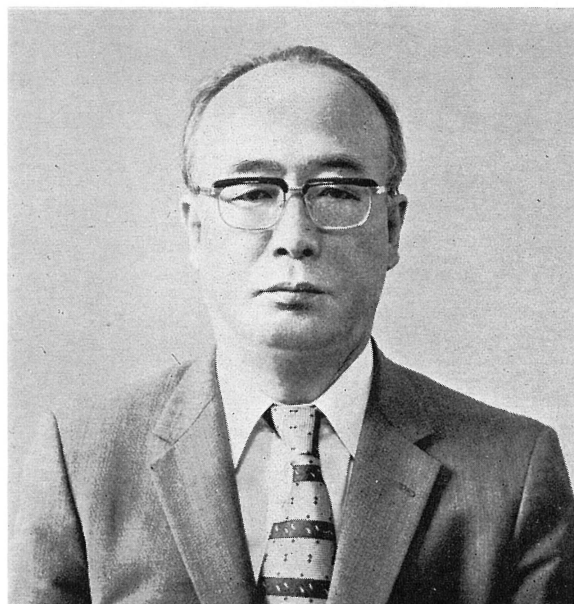


[75]文學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2339154>

出版情報：文學研究. 75, 1978-03-31. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



故元田脩一教授

元田脩一教授略歴

大正十五年二月十五日

熊本県上益城郡矢部町に生まる

昭和二十二年三月

立命館専門学校卒業

昭和二十六年三月

九州大学文学部卒業

昭和二十六年四月

九州大学大学院特別研究奨学生となる（三年間在籍）

昭和二十七年七月

フルブライト留学生として渡米（半年間滞米）

昭和二十九年四月

西南学院大学嘱託講師

昭和三十年四月

北九州大学講師

昭和三十一年四月

北九州大学助教授

昭和三十五年十月

福岡女子大学助教授

昭和四十年四月

九州大学助教授

昭和四十七年六月

九州大学教授

昭和四十九年八月

文部省在外研究員として渡米（一年間滞米）

昭和五十二年一月十七日

福岡市浜の町病院にて逝去

昭和五十二年一月十七日

勲四等旭日小綬章および従四位に叙せらる

元田脩一教授主要業績目録

著書

現代米英文学の方法と思潮

開文社

昭和三十二年

短篇小説の技巧と分析

開文社

昭和三十四年

エデンの探求

開文社

昭和三十八年

アメリカ短篇小説の研究——ニュー・ゴシックの系譜

南雲堂

昭和四十七年

論文

「アッシャー家の崩壊」とゴシック・ロマンス

「文学研究」六十三 昭和四十一年

Young Goodman Brown における Witches' Sabbath

「英文学研究」十八巻一号 昭和四十一年

「ねじの回転」の諸解釈 上

「文学研究」六十四 昭和四十二年

サローヤン——挑戦と挫折

「季刊英文学」四巻三号 昭和四十二年

精神分析学と文学批評の問題

「英語文学世界」二巻六号 昭和四十二年

「ねじの回転」の諸解釈 下

「文学研究」六十五 昭和四十三年

トルーマン・カポーティ「遠い声、遠い部屋」の限界

「文学研究」六十七 昭和四十五年

ニュー・ゴシックとしての「夜の木その他の短篇」

「文学研究」六十八 昭和四十六年

ナサニエル・ホーソン「ラパチーニの娘」——限界への挑戦者と屈従者

「文学研究」六十九 昭和四十七年

デイズデイルの変貌

「文学研究」七十一 昭和四十九年

ヘスター・プリンの変貌

「文学研究」七十二 昭和五十年

「わたしの親戚のモリノー少佐」についての諸解釈

「文学研究」七十四 昭和五十二年

元田教授のこと

大江三郎

元田教授の専門はアメリカの短篇小説であった。アメリカの短篇小説の流れを大きく「ニュー・ゴシック」「開眼の物語」「ユーモア」の三つに分け、その第一、ニュー・ゴシックの系譜を徹底的に追求した成果が労作『アメリカ短篇小説の研究』である。このようなアメリカ短篇小説の捉え方、ニュー・ゴシックの伝統の分析のしかたにおいて、元田教授は非常に個性的であり、疑いもなく我が国におけるアメリカ文学研究の一方の旗頭であった。この『文学研究』誌上にも、この立場から特にヘンリー・ジェームズとホーソンの掘り下げた論を展開した。

また、故人の文字どおり遺稿となったホーソンの『モリノー少佐』についての研究も本誌第七十四輯に載ったものである。元田教授はこの論文の初稿が出て間もなく、校正をする気力も体力もつきはてて世を去られたのであるが、この論文の中で元田教授はこれまで執拗に追求して来られたニュー・ゴシックから開眼の物語に視点を転じようとしておられることがうかがわれる。まだまだこれから研究を深め、発展させることのできた人であった。なお、教授の主要論文十六篇が、遺稿集『アメリカ小説研究―批評論と作品論―』として昭和五十三年一月、開文社より出版された。

私の故人についての印象はなによりも大変な勉強家だったということ、なんらかの型にはまることを極度にきらった人だったということである。お元気なころ、文学部の研究室であかりの消えるのが一番おそいのが元田教授の部屋であった。所定の授業時間を一時間以上超えて、なおたんたんとして動じないのがこの人の人柄であった。

元田教授亡きあと、我が英語学・英文学教室にはなにか大きな穴があいてしまったような感がある。しかし故人の独特の人柄、実際よりかなり老けてみえた風貌、独特の話し方、歩き方の印象までもが、死後私の記憶の中でうすれることなく、いよいよ鮮明であるのを感じる。人徳というものであろうか。